

矮性ハナショウブの新系統について

栃木県 金子 幸雄

植物には極端に草丈が低く、他の器官が肥厚したり奇形になる現象がある。この形質は矮性と呼ばれ、遺伝的要因によることが多く、花卉園芸では「ミニチュア品種」として貴重である。ハナショウブでは、江戸時代末期に松平菖翁が「葉尺十寸にたらず、小輪の三英細葩（は）にて、瑠璃色のうるわしく、花菖蒲と同時に花開き、疑いなく矮草也」と記している（葛飾区郷土と天文の博物館1998）。また1968年に、石山貞吉の作として矮性品種‘千歳姫’が登場した（日本花菖蒲協会1971）。この品種は、三英、淡紫であり、地色には紫の縞が入る。花は小さく、開花期は中期である（日本花菖蒲協会2008）。このため‘千歳姫’は、ハナショウブ品種審査基準の“矮性”の標準品種として用いられた（農林水産省1986）。このことから、日本花菖蒲協会では、矮性の基準を草丈50cm以下としている。しかし、ハナショウブの矮性品種の例はきわめて少なく、新たな矮性系統はハナショウブの育種素材として活用できるものと考えられる。

筆者はハナショウブの栽培を趣味とし、実生からの新しい系統作りも楽しんでいるひとりである。本稿では、突然得られた矮性個体から後代を展開しているので、その概要を紹介する。

本系統の元々の親品種は、山形県長井市で長井古種と言われる‘爪紅’である。育成経過は、‘爪紅’の放任受粉によって採種した実生グループ（親系統）を自家受粉して得た数百個体のうちから、矮性と思われた1個体（草丈約27cm）を選抜した（北原2014）。この個体は花粉稔性がある程度認められたため自家受粉を行ったが、1年目は不稔であった。そこで、翌年は再度自家受粉を施し、得られた胚を試験管内で培養したところ多くの個体を得た。これら

は‘爪紅’から三世代目の個体群である。今回、ポット上げした56個体について形態的調査を行った。

調査は、ハナショウブの品種特性審査基準（農林水産省1986）に準じて行った。

この個体群は、順化後の5月になると生育が旺盛になったが、矮性個体の草丈は伸長せず、親品種の‘爪紅’や正常型個体と明確に区別できた。開花期における特性を表1と図1に示した。矮性個体の出現率は70%であり、半矮性（今回は茎長35cm以上、50cm未満とした）と思われる個体が9%、正常型が21%であった。茎長は、‘爪紅’の60cmに対し、矮性個体の平均が25cm、半矮性のそれは40cmであり、矮性個体は前世代の矮性個体の株分け個体（平均21cm）とほぼ同程度であった（図1）。本調査では、個体数が少ないため、遺伝に関する統計的解析は出来ないが、多くの矮性個体を得られたことから、この形質は遺伝するものと考えられた。矮性個体は分けつ茎が多く、草型は直立であり、葉はすっと立っていた。開花日は、‘爪紅’が6月7～11日であったが、矮性個体のそれは最も早い個体が6月2日であり、遅く咲いたものは7月6日と、かなり広い変異を示した。このうち5個体は7月に入って開花を始める晩生であった。この晩生個体は、ハナショウブの開花がほぼ終わりを迎える頃（栃木市では、晩生品種の開花は6月25日頃）から花を楽しむ可能性がある。なお、正常型群は6月4日から6月19日であった。花色は、‘爪紅’のように白を基調としているが、内花被（鏝）の紫が‘爪紅’に比べ濃かった。一方、外花被の縁に薄い紫色を呈するものや、紫の脈とかすりが入る個体もみられた。花形は平咲きが多く、またすべての個体が三英であった。花の大きさ（花径）は‘爪紅’に比べやや小さく、花弁幅がやや広く、丸みを帯びる個体が多かった。また外花被がねじれるような奇形花や受け咲き様の個体もみられた。なお余談になるが、正常型個体では花の数が3以上（4）の個体もみられ

た。このことは、キショウブの血の入った‘愛知の輝’などを除くと、ハナショウブには多花性品種が少ないことから、この形質の育種素材となることも考えられた。

庭に植えるハナショウブは、集団におけるバランス、植栽配置を考える必要がある。この場合、手前に矮性個体群を、後方に通常の品種を配すると、奥行きが出て、庭空間の“みばえ”が高まると思う。また本系統は草丈が低いにもかかわらず、花が大きく、かつ窒素成分を多用しても倒伏や徒長し難いため、平鉢盆用の「寄せ植え」としての利用も面白い。

以上のように、本系統の矮性形質は遺伝することが明らかになったことから、この系統を母体（母本）として、ほかの有用品種と交配することにより、更なる矮性系統の育成が可能であると考えられる。

参考文献

- ・葛飾区郷土と天文の博物館（1998） 堀切と花菖蒲 葛飾区古文書資料集11：15-61.
- ・北原かおり（2014） 長井系ハナショウブにおける有用形質の遺伝・生理学的解析と育種学的利用に関する研究。東京農工大学大学院学位論文：1-154.
- ・日本花菖蒲協会（1971） 花菖蒲大図譜 栗林元二郎・平尾秀一編集 朝日新聞社 図版101および解説14.

- ・日本花菖蒲協会（2008） 品種写真集「た行」CD-ROM.
- ・農林水産省（1986） アイリス属（旧名アイリス（アヤメ））（Iris L.）農林水産省品種登録ホームページ 「農林水産植物種類別審査基準Iris L.」PDF. 1-42.

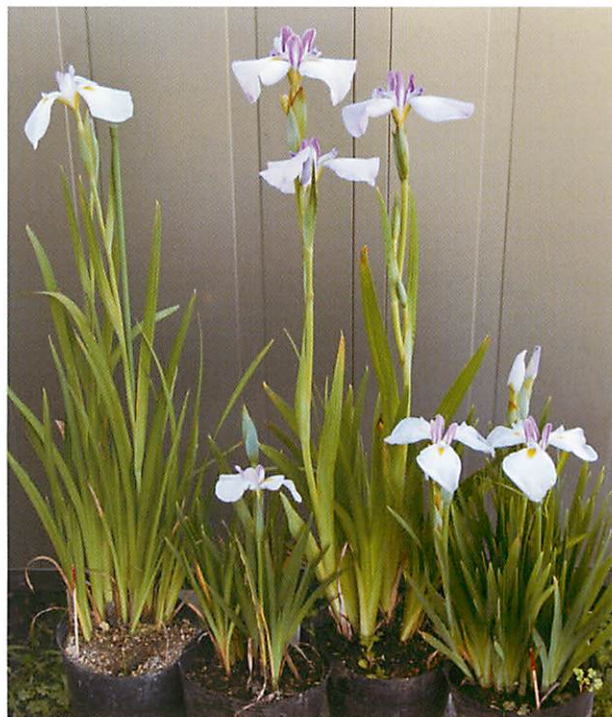


図1. 矮性系統および近縁系統の形態。
左より：
‘爪紅’
矮性個体（親世代の株分け個体）
矮性個体の自家受粉により出現した正常型個体
矮性個体の自家受粉により出現した矮性個体

表1 ‘爪紅’ から偶発した矮性系統および近縁系統の形態的特性

世代 ¹⁾	草型 ²⁾	出現個体数	茎長(cm)	開花日	花色 ⁴⁾	花径(cm)	花幅(cm)	備考
	D	39	24.5±5.2	6/2~7/6	淡(3), 濃(8)	11.1±1.5	5.0±0.8	ぼかし等有
3	SD	5	40.4±4.0	6/6~6/19	淡(5)	10.2±0.9	4.9±0.5	
	N	12	54.9±7.1	6/4~6/19	淡(9), 濃(3)	13.1±1.4	5.5±0.6	
2	D	6 ³⁾	20.9±2.5	6/4~6/11	淡(6)	10.7±1.5	4.6±0.7	
0	N	3	59.0±1.7	6/7~6/11	淡(3)	13.3±2.1	4.3±0.3	爪紅

¹⁾ 元親の‘爪紅’を0世代としたもの。 ²⁾ D:矮性, SD:半矮性, N:正常型。 ³⁾ 偶発した矮性個体からの株分け個体。
⁴⁾ 淡:地色は白で、外花被や内花被に淡い紫、濃:外花被や内花被がやや濃い紫、()内は個体数。